

親鸞さま、なぜお念仏なの？ - 出会おう、語ろう、今ここで -

積尊の生涯(3)
転法輪く涅槃
藤谷知道

初転法輪

梵天の勧請を受けたブツダは、「いま、われ、甘露の門をひらく。耳あるものは聞け、ふるき信を去れ」と、天地に向かつて伝道を宣言されました。そして、ベナレス郊外の鹿野苑(サルルナート)にいき、かつて苦行を共にした五人の仲間の中道を説かれました。

「中道」とは、快樂主義か苦行主義かと、両極端になりがちな人間の囚われ心(迷い)をこえて、あるがままに見る智慧に立つ道のことです。

四聖諦

「中道」に続いて、ブツダは「苦・集・滅・道」の四聖諦を説かれました。

苦諦とは「人生は苦である」と知る智慧です。

現代は「幸せ」という言葉がもてはやされ、「幸せかどうか」が人生の価値を決定するかのようになりがちです。しかし、その足許をよくよく見てみれば、「幸せ」は見果てぬ夢か、はかなく崩れ去るひと時の歓びではないでしょうか。

「人生は苦なり」と諦観(あきらかにしる)する時、厳しい現実を生きるいく勇気が与えられると思います。

集諦は、苦は自身の無明(渴愛・執着)から集起すると知る智慧です。

滅諦は、苦の原因である無明(渴愛・執着)が止滅するとき、苦から解放されると知る智慧です。

最後の道諦は、苦の原因である無明(渴愛・執着)を止滅するための道としての八正道が説かれます。

縁起

さて、この四聖諦・八

正道の教えは「縁起の理法」から導き出されたものです。

縁起とは、ものごとはすべて「縁」によって生起する」という意味です。

縁起の理法は自業自得(自因自果)の教えでもありません。もし「苦」の原因が「他」にあるなら、私はいかんともしがたく、愚痴に沈むか、運命を呪うか、あるいは超越的な神々に祈るしかないでしょう。しかし「苦」の原因

が私自身の煩惱(渴愛・無明)にあるなら、「苦」の原因である煩惱(渴愛・無明)を止滅することが大事になってきます。

三法印

この道理をわかりやすく説いたのが三法印です。

具体的には、諸行無常(この世のすべては変化・生滅してとどまらないということ)諸法無我(この世のすべて

は因縁によって生じたものであって実体性がないうこと)涅槃寂静(煩惱が寂滅しておとずれた安住の境地)の三つです。

無明に覆われ「苦」の大海に溺れていた者が、ブツダの説く「諸行無常・諸法無我」の道理にめざめるならば、無明の闇は晴れて涅槃寂静の世界に生まれ出ることになる、というのです。

涅槃

梵天の勧請を受けて始まった「転法輪」の人生も終わりが近づいてまいりました。

80歳になったブツダは王舎城を出て、生まれ故郷のカピラヴァストウを目指します。しかし、その途中で、鍛冶工チュンダが捧げたキノコ料理にあたり、ついにクシナガラ(沙羅)の二本の樹の下で涅槃に入られることに

なりました。ブツダは、途方に暮れているアーナンダ(阿難)に対し、自らを灯明とし、自らをよりどころとして、他人をよりどころとせず、法を灯明とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ。

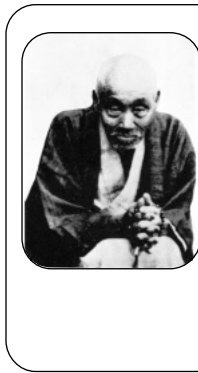
と諭されました。ブツダが沙羅双樹のもとで入滅してから二五〇〇年。その間、人の世は栄枯盛衰を繰り返してきましたが、ブツダの教えは変わることなく、この私にまで届けられました。私がお念仏申すとき、ブツダは時空を超えて、私の横におられるのです。

第四回

親鸞聖人のご生涯(1)
藤谷知道
「三味線婆ちゃん」
藤谷純子

5月12日午後1時半

念仏生活を妙好人に学ぶ(3)
浅原才市さんに
学んだこと
藤谷純子



才市さんは江戸の終わり、嘉永3年（1853）に生まれました。7才の時に両親が離婚して母の実家（島根県温泉津町小浜）に帰ったが、母はまもなく再婚したという。父は髪をおろして西教と名告り、小浜の安楽寺の墓地のそばに草庵を結んで暮らしていた。才市さんは11才で大工の年期奉公にやられ、20才の頃に船大工になり、25才で結婚して小浜に帰ってきた。酒や賭博で警察沙汰にもなったりしたが、45歳の時に父親が浄土へ帰っていったことから、父の念仏が「おやのゆいごん、なむあみだぶつ」として身にしみて求道の生活が始まった。

その頃には下駄屋になっており、64才の頃よりかんなくずに念仏の詩を書き始めた。昭和7年、83才で浄土へ帰るまで、六五〇〇にもものぼる念仏の詩を書き付けているという。才市さんの詩で、私が忘れられないのは次の詩です。

わたしや あさまし
貪欲が子を生んで
瞋恚の名をつけられて
愚痴の名をつけられて
また貪欲の孫を生み
わたしや あさまし
また瞋恚の孫を生み
わたしや あさまし
またまたあさまし 愚痴の子を生み
このあさましが曾孫にひい孫生んで
はずかしはずかし……
才市さんは聞法によって、自分を苦しめているのはわが煩惱（貪・瞋・痴）であったと目覚めて「あさまし」「はずかし」と懺悔している。そ

の時、才市さんは、そんな自分をおさめ取って捨てない阿弥陀仏と出会っている。
わたしのところが あなたのところ
あなたのところが わたしのところ
わたしがあなたになるのじゃないが
あなたがわたしになるのころ

才市さんと阿弥陀仏は離れていない、機法一体の南無阿弥陀仏である。下駄を作りながらいつでも阿弥陀仏と話している南無阿弥陀仏の才市さん。「念仏とひとり遊びのできることを これを大悲と私に言う」という藤原正遠先生の歌が思い出される。
また才市さんの詩で驚かされるのは、こんな詩です。
わたしや 臨終すんで 葬式すんで
みやこ（浄土）に心住ませ
てもろうて
なむあみだぶつと浮世におるよ
このような生きる世界が変

わかってしまうことを、才市さんは自分の言葉で「目の幕切り」とか「目が境」と表現している。娑婆世間にありながら、心に浄土が開けてきたのだ。浄土から娑婆を見る目をいただいて、浄土と娑婆をいただきながら、安んじて娑婆に生きる者になれた。
ええなあ 世界 虚空が
みなほとけ
わしもその中 なむあみだぶつ

才市さんは南無阿弥陀仏の
感想 瀬々弘子（四日市）
お釈迦様の伝記は、本で読んだり、子供番組で見たりして、全く知らない人はいないくらいです。そして当たり前のように書かれている、生まれてすぐ七歩、歩き「天上天下唯我独尊」と言ったという話は、文字を使わず口伝えする中でできたと、お寺で話されました。
素晴らしい悟りの内容ですが、気の遠くなるような長い間に、たくさん弟や話を聞いた人がいるわけですから解釈も違っただろうし、相手

なかで、生も死も、自他の対立も、善も悪も、苦も楽も、「なむあみだぶつ」とお慈悲の中に生きて、昭和7年83才で浄土に帰られたのでした。
才市さんは、お念仏といつても対話しては懺悔し慚愧し、お念仏に助けられる喜びを書き付けていきました。助ける法（仏さま）が助かる機（衆生）になっている、機法一体の南無阿弥陀仏を才市さんに教えていただきました。
南無阿弥陀仏

によって喻えも違ったろうと思いましたが、大量のお経も、私はこれをと、それぞれ持ち帰ってしまったので、各宗派に分れてしまったと思います。例えば苦行を真似たり、瞑想（禅）に力を入れたり、訳すことに専念したりしたことが解ります。
お釈迦様は家族を捨てましたが、親鸞聖人はわざわざ家族を持ちました。家族がいれば養わなければいけません。自分ひとりなら楽なのに、どうしてなのでしょう。
次回も見逃せません。